



第 10 回英語指導研究会 SPALTAN ENGLISH+ 東京授業研合同研究会 2021 年 5 月 15 日

田口徹先生(三鷹第 4 中学校 2 年生)の授業

2016 年春に発足した英語指導研究会もおかげさまで 10 回目の開催となりました。アニバーサリーの今回は、東京の授業研と合同での開催で、なんと田口徹先生ご本人も遠隔で参加していただけることとなり、全英連の授業を田口先生そして長先生の解説付きで参観することができる、非常に贅沢な内容となりました。

また、コロナ禍でなかなか授業研が開催できない状況が続いています。この状況下でも何とか授業研究会を実施する方法はないかと模索している中 Zoom を使って、東京と弘前の授業研とで合同授業研究会を実施してはどうかということになりました。遠隔での授業研究会はどうあるべきか、そして東京と弘前を繋いでの合同開催など、今後の授業研の在り方を考える挑戦的な試みの研究会となりました。「まずはこじんまりとやってみましょう」と事前の打ち合わせでは話していたのですが、ふたを開けてみると、北は北海道から南は熊本まで、日本全国から 45 名の参加がありました。

普段、学校にいたり、対面で研修会では出会うことのない、様々なバックグラウンドを持つ先生方との意見交換が行われて非常に密度の濃い、充実した研修会となりました。

授業の指導過程とディスカッションの内容

Greeting and Small Talk for Warm up

- 日付を確認し、この日がミッキーマウスの誕生日であることを、ミッキーマウスが好きな生徒を指名し、ミッキーマウスの年齢などを聞く。さらに、そこから授業の目標文型である“the most animation character in Japan”という話題に広げることで、生徒たちとインタラクションをする。

Review of the Previous Lesson

- 前時に扱った単語をフラッシュカードを用いて復習する
- Dictation Test をする
- 生徒に「自分が海外のスポーツ選手だったら」という設定で自分の国について紹介するプレゼンテーションをさせる

ここで、Zoom のブレイクアウトルームを使って、グループに分かれてディスカッションを行いました。その後各グループから、話し合った内容や田口先生に対する質問などをご紹介いただきました。

- 授業の進め方に関してかなり刺激的であり、非常に参考になった。学力差が大きいクラスでどうやったら勉強するという気持ちにさせるかについていいヒントとなった。
- 生徒との関係がしっかりできている。会話の中に、ミッキーマウスやドラえもんなど生徒の興味関心を織り交ぜている。そのため、生徒が話したくなっている。
- あれだけのテンポ、あれだけの発言量はすごいと思った。これは普段の指導の積み重ねがあってこそ



だと思った。

- 一般的には、生徒のプレゼンテーションの最中に、先生から質問をしてしまうと、話そうとしている内容を忘れてしまうことがあるが、passionate という単語の意味を聞かれた生徒が、by the way で切り返しているところが素晴らしい。また、自分が海外のスポーツ選手だったらという設定することで、生徒が「I」を主語にして話せるようになっており、生徒が英語文を作りやすくなっている（3人称のs(es)をつける必要がないなど）。また、テンポがよい、指示が簡潔であることがリズムを作っていると感じた。
- 生徒同士のインタラクションの中で、生徒がパツとリアクションができること、見た目には自然なやり取りなので、見逃しがちであるが、こういうところにこそ田口先生の日々の指導の蓄積が感じられる。また、小学校における英語の授業でも、レスポンスの指導は結構行われているので、中学に入ったら、自然なレスポンスができる生徒は今後増えていくだろう。
- 最後のプレゼンテーションで、生徒が一方向的に話すのではなく、先生やクラスメイトに質問を自然に振っている様子が見られた。これは普段からやっていないとできないことだと思った。

参加された先生からの質問と田口先生からの回答

- どうやったら、あんなにボランティアで生徒たちが発言するようになるのか？
(田口先生の回答) 仕掛けがないと生徒は動かない。面倒くさいことから逃げたいというのが人間。やったら得だからとか、ニンジンに誘われてやってみたら意外と楽しいじゃんと思うのが実際じゃないかと思う。
なぜあの生徒たちが手を挙げたのかというと、
 - (1) パフォーマンスを4回、5回のように拍手でその場で評価する。
 - (2) その拍手の数だけハンコを押してあげる。
 - (3) そのハンコの数を学期に一回合計して標準点として評価の材料とする。
 - (4) 中間・期末テストでいい点数をとっても発表をしない生徒は5をとるのは難しいとしてある。
 - (5) そうする、生徒ははじめのうちは仕方なく発表しているが、やってみると成就感が気持ちよくなっていくようになり、どんどん凝った発表をするようになる。
 - (6) ただ、覚えたのをいうのではなく、工夫がないと5はあげないようにしている。
- プレゼンの課題はどのように出したのか？
(田口先生からの回答) 今回の課題は「どこかの国のトップアスリートになって、その国のスポーツ事情を他の国と比べながら紹介しなさい」である。前時に学習した more/most を使って発表できる内容になっている。公立中学校なので英語が苦手な生徒などいろんな実態がある。そのため、前の時間にテンプレートは与えてある。そのため、生徒はそれを自分なりに変えて覚えたものを発表していると思う。ただ、英語が得意な生徒には、テンプレートから離れれば離れるほどハンコ5個をもらえるチャンスが高くなると伝えている。一方、英語が苦手な生徒にはテンプレートのままでも発表することに意味があると伝えている。
- プレゼンテーション指導は普段からどのように行っているか？
(田口先生の回答) 中学生がいきなりペラペラ英語を話せるようになることはない。そこでモデルに



すべきものはやはり教科書であると考えている。教科書をどう指導するか、音読指導をどういう風にするか、どう気持ちを込めて音読の練習させるかを大事にしている。中1の最初は教科書本文のレシテーションであったり、教科書本文をちょっと変えてスキットを発表させたりしながら、ちょっとずつスピーチやプレゼンのレベルを上げるようにしている。生徒には教科書やモデル参考にしてもいいけど、自分の言いたいことを発表するようにと指導している。また、学期に一度は必ず全員にプレゼンやスキットの実技テストを課すようにしている。

● フラッシュカードの提示方法について

(田口先生の回答) 現在は ICT 機器を活用して、パワーポイントやデジタル教科書にフラッシュカードの機能を使うことができるが、昔は紙のカードでいろいろな提示方法を練習してやったものだ。それが教師の「職人技」でありあれがなくなってしまうのはさみしい気がする。ただ、フラッシュカードのねらいが「残像を見ただけでその単語を認知できる訓練」であることは変わらない。パワーポイントで提示する場合であってもただただ見せないで、さっさと見せることが重要であると思う。

● ディクテーションの後に、回収していたがその後どのように扱うのか？

回収後、教師が採点する。フルセンテンスでスペルミスなどない場合はハンコを2個押して返却する。それを生徒はノートに貼って保管する。

長先生から

最初の Greeting のところで田口先生はミッキーマウスの誕生日ということを引き出した。2000年当時は、調べるのは大変だったが、今であればインターネット上に「今日は何の日カレンダー」というのがあって、簡単に調べることができる。ぜひ、今日帰ったら「今日は何の日 カレンダー」で検索してみしてほしい。今日(研究会の開催日=5月15日)は5・15事件、マダムキュリーの旦那さんの誕生日、森進一の誕生日である。

生徒が積極的に手を挙げる方法はいろいろある。例えば授業の終わりに「今日15回以上挙手した人は手を挙げて」として、その人に「You are today's iron person. (今日の鉄人)」カードを渡して、それをノートに貼らせておいて、学期末にそのカードが何枚あるか数えさせるようにしていた。こうすることで、生徒は手を挙げるようになる。

授業参加には、塾の先生にも案内状を出すようにしていた。父兄に交じって塾の先生も参観するようになった。塾としては、塾に来たからには成績が上がらないと困るので、授業を見せることで学校の授業にあわせて指導してくれるようになる。

フラッシュカードについては、教科書会社のものもいいが、自分の使いやすいサイズなどもあると思うので自作することをおすすめしたい。フラッシュカードはやはりフラッシュさせてほしい。また、最初の3文字を識別できるようにすることも重要である。



Presentation of the New Material

(田口先生から)

自分がこの授業をした時のポリシーは、全英連という大規模な公開授業で確かに教師にとっても生徒にとってもプレッシャーがかかるものではあるが、事前に段取りを教える、あらかじめ質問を教える、プレゼンの練習を事前にやらせておいて、その発表だけを延々とやる、言語材料の導入だけをやって教科書をまったく現れないショーのような公開授業（田口先生はこういう公開授業を「英語劇」と呼んでいる）をしても、全国から見にきた参観者のためにならないと考えた。この授業では、授業の段取りも事前に教えていないし、あの場で生徒が手を挙げてくれるかどうか勝負だった。つまり、この授業のポリシーは「全国5万人の中・高の英語の教員が必ずやっていること、それは教科書をどう使ってどう授業をするか？」である。それをあの場で見せたいと、金谷先生や長先生に相談して、あえて教科書にフォーカスした授業を公開した。授業の開始のプレゼンテーションも、普段、教科書を使ってどういう指導をすればああいう発表ができるようになるのか、そのプロセスをお見せしたかった。

- オーラルインタラクション
- Q&A
- 新出単語の導入と練習

ここで、Zoomのブレイクアウトルームを使って、グループに分かれてディスカッションを行いました。その後各グループから、話し合った内容や田口先生に対する質問などをご紹介します。

- 教科書は分量が短い、語彙の制限がある。田口先生のオーラルイントロダクションではそういうものを補完する形がとられていたのではないかと感じた。
- オーラルイントロダクションの初めに生徒たちが知っているボールゲームについて聞いたのはブレインストーミングに近い活動であると感じた。その後の活動に使いやすそうな足場架けなのではないか。目標文型の最上級を自然な形で使えるように田口先生がモデルとなって再起させているところが素晴らしいと感じた。ホワイトボードに貼ってあった、イギリスの地図が効果的であった。フラッシュカードを使った単語の指導の際に、ただ単語を提示するだけでなく、身近な例文をあわせて提示しており、その単語が実際どう使われるのかが分かりやすくなっていると感じた。
- 田口先生が紹介する内容が、生徒たちにとって魅力的であり、興味関心を引き付けられるものであった。英語の授業なのに、まるでスポーツについて勉強しているような感覚を持った。
- 田口先生から、当時の自分はしゃべりすぎているのではないかと提案があった。さらに、現在は小学校で英語の授業が行われているので、生徒の実態把握が大切ではないかという話になった。毎年、どう学習をしていくかが変化するので、それにあったものを教師は提供していかなければならない。
- オーラルインタラクションは、素晴らしいやり取りではあったが、すごく長いうえに豊富な情報を扱ったので、どうしても生徒が受け身になってしまっている印象を受けた。そこで、途中できってリスニングポイントを示した上でCDをきかせる方法もあるのではないかと提案がなされた。また、自分の好きなスポーツを、教科書内容と関連させて自己表現させるなどゴールを前もって示して聞



かせる方法もありかもしれないと思った。

- 非常に工夫された導入であり、生徒が吸い込まれていくような内容であった。生徒を飽きさせないようなテンポの良さもあった。社会（地理・歴史）と関連付けた教科横断型の授業であった。

参加された先生からの質問と田口先生からの回答

- この授業の目的は何であるか？

（田口先生の回答）「世界のスポーツに興味を持たせる・世界のスポーツ事情を知る」つまり、文化的な側面に興味を持たせたかった。

- このような授業をするために、普段どういう観点で情報収集しているか？

（田口先生の回答）若い時の自分にアドバイスするとしたら「お前しゃべり過ぎだろう！」である。やはり、ちょっと長いと感じる。教科書の内容に興味を持ってもらうためには、読む楽しみも残しておかないといけないので、「全部の情報を出してしまう必要はないんだよ」と若い自分に言ってあげたい。ただ、中学校の教科書は、内容があまりにも薄っぺらいので、教科書の内容だけにしてしまうとすぐ終わってしまう。そのため、教科書に載っていないプラスの情報をオーラルインタラクションでいつも出すようにしていた。なので、バランスが重要である。あんまりプラスの情報を与えすぎでも過多になってしまうし、教科書内容だけだと薄っぺらくなってしまふ。特に学力差の大きい学校や中高一貫校のように高い学力の生徒が集まる学校だと、教科書内容だけだと全員寝てしまうだろう。そういう学校ほど「あれ！？そんなこと書いてないのに！」という情報をところどころに織り交ぜることは、生徒を引き付けるいい方法ではないかと思う。

- 田口先生が授業で使っているテクニックとそれを身につける方法

（田口先生の回答）授業で大事にしているのは「生徒の名前を覚えること」と「生徒の個人情報をできるだけ集めて、インタラクションのネタを多く持つ」ことである。生徒との関係がより深くなるように普段から情報を集めている。50分間の授業は「だんごの串」であり、あいさつから最後のまとめまで、その日の授業で目指したいことが統合的にリンクしていることをいつも意識している。今回の授業は、最上級が目標文型であるのでウォーミングアップの時から最上級を使うようにしている。雑談風に話しているが、実はちゃんとねらいをもって話していると考えてティーチャートークをするように心がけて、それを暗示的に継続していると生徒がある日突然ポツと話すようになる。つまり暗示的に教師が与えていることが、いつか生徒のプロダクションにつながるのである。

- オールイングリッシュの授業をするための基盤づくり

（田口先生の回答）オールイングリッシュの授業を目指しているわけではない。「授業を英語で行うことを基本とする」が指導要領で明文化されたが、大事なことは生徒に英語を使わせることである。先生が一方的にしゃべって先生の英語力をひけらかしてもいい授業ではない。英語だけで理解させたい場面と文法や文化的な背景の説明など日本語を使う場面のメリハリをつけることが重要である。この授業でも、教師の発話時間は19.7分、生徒の発話時間が10分であり教師は生徒の倍近く話していることが分かる。結構英語を使っているなと思っても、意外と生徒は英語を使っていないものである。生徒の英語の発話量を増やしていく授業を目指していくべきである。



長先生から

田口先生の授業のバックグラウンドはパーマーのオーラルメソッドがある。以前、田口先生の授業を見に行った時に、教室に卓球台が置いてあって驚いたことがあった。そして卓球部の生徒と田口先生とで卓球をして「We are playing table tennis.」を導入していた。これこそ、「絵やイラストより実物を使ったほうがいい」というパーマーの提唱と合致する。生徒に英語を使わせる工夫は様々ある。生徒同士で電話する時があると思うが、そういう場合には英語で電話かけるように指示した。「長電話はダメよ」という時代であったので、「英語であればいくら長電話してもいいし、ひよっとしたらお小遣いがもらえるかもよ」などと言ったものである。また、教室の前の入り口に、英文を貼っておいて、教室に入るときにはそれを読んでから入るようにと指示を出した。どうやったら生徒に英語を使わせることができるか勝負である。また、英語教室に OHP やスピーチテーブルや世界中の方角と距離を表示したり、世界中の時間を示した時計などを用意して、「生徒のために何を我々は環境を整えてあげるか」が重要である。

丹藤先生から

田口先生のオーラルイントロダクションにおいて絵を使いながら、自分のスピーチを整理している。ただ聞いているだけだとどんどん聞き流してしまうが、それを絵によって知識の統合をしたり、単語を貼ることで文字化を図っている。ただ、興味関心だけではないことを見てほしい。今の教科書にはレッスンの前にオープニングのアニメーションがついている。オーラルインタラクションという形ではないかもしれないが核心の部分は同じである。また教科書については、習っていない文型・単語は使ってはいけないというような風潮があるが、現実の言語使用場面では、肯定文も疑問文も否定文も一緒に出てくる。あくまで教科書は教材であるので、先生それぞれがどう料理するかという認識が重要である。

Reading Aloud

- 教科書本文の CD を聞かせながら、重要な語や表現の説明を行う
- 教科書の音読をする

Group Work

- 以下のワークシートにある問いについての答えをグループで考え英語で書く

三鷹市立第四中学校 2年英語科通信 NO 28

Task: 日本の事をほとんど知らない外国の人が下の①～⑤のような疑問を持っています。この疑問に答える英文をグループで考えなさい。(教科書や辞書を参考にしてもかまいません。) 考えがまとまったら英文を書き出さなさい。グループリーダーの人に後で発表してもらいます。



- ① 日本で生まれたスポーツにはどのようなものがあるのか。
- ② それはいつ頃、だれが考え出したものか。
- ③ そのスポーツで一番人気のある選手はだれか。
- ④ 日本で現在、若者に人気があるスポーツはなにか。
- ⑤ 日本ではバレーボールとバスケットボールではどちらが人気があるか。

*②は次回までに図書室等で調べてください。



ここで、Zoomのブレイクアウトルームを使って、グループに分かれてディスカッションを行いました。その後各グループから、話し合った内容や田口先生に対する質問などをご紹介します。

- グループワークにおいて、自分たちが習ったことを身近に感じられる授業で、英語を生かしている。例文を出してから、グループワークに移るのが早かったのではないかと英語を通して生徒たちがたくさんやり取りできていると感じる授業であった。
- リスニングポイントを示して、聞かせるポイントを変えながら飽きさせないように何度も聞かせていた。音読の指導で田口先生が日本語を言って、生徒が英語を読むというものがあったがこれは非常に効果的な活動である。
- (長先生から) 実践の経験から「読めないものは聞き取れない」ということにたどり着いた。だから英語の初期において音読が非常に重要である。5回読んだから☆を書かせて教科書を星でいっぱいにして指導していた。また、ディクテーションの指導でも、先生が読んで止めた最後の文を書くという風にして毎日繰り返していた。なんでも長い期間をかけて基礎から徐々にできるようにすることが重要である。目の前の生徒の習得状況をよく見て指導することが重要である。
- 音読の場面でももう少し時間をとって、個人指名をしたかった。
- 20年前とは思えない色褪せない実践であった。音読は単調になりがちだがいろいろな変化をつけながら飽きさせないように練習させていた。また、机間巡視でも生徒一人一人に応じた声掛けをしていた。

参加された先生からの質問と田口先生からの回答

- 指導手順が新出単語を導入してから本文を扱うという流れになっていたが、逆ではなかった理由は何か？
(田口先生の回答) 語彙をいつ指導するかは、議論が分かれるところだが、結局はケースバイケースである。新出語彙が類推できるのであれば、いきなり本文をきかせて読ませるといってもあり得ると思うが、単語が分からないのでは全然理解できない英文である場合は語彙を先に指導するべきである。「絶対語彙が先」を決めつけないほうが良い。ケースバイケースで柔軟にやるべきだろう。
- 今回の授業のめあてが達成できたかどうか見取る、評価・振り返りはどうするのか？
(田口先生の回答) グループワークで文章を考えること自体がキーである。教科書の英文をある程度リサイクルしながら、日本の実情を表現できるか？それを考える中で今日学んだことを生かせるかが今日の振り返りにつながると自分では考えている。
- 何回かリスニングを繰り返すと、生徒が一回で聞けなくなるのではないかと？
(田口先生の回答) CDを使った本文のリスニングは聞き取りではなく、発音の確認である。聞き取りはある程度生徒が分かる英語の少し難しい(+1)のレベルをたくさん聞かせることが重要であると考えるので、オーラルインタラクションが聞き取りという位置付けである。
- 机間巡視ではどのようなことを見ているか？



(田口先生の回答) 音読の場面では、できない子の補助をして、どういう声掛けをするかを見せたかった。グループワークでは宿題の点検とみんながいいなと思う生徒をみんなに分かるように褒めること。

最後のまとめ

田口先生から

私も若かったし、あの授業を見ると粗（あら）も見える。決して完璧なものではない。当時、自分なりに考えてベストを尽くした授業ではあるが、今見れば「あっちの方がいいよね」ということはたくさんある。ただ、ICT の時代になっても生徒のことを考えて、生徒とやりとりしながら授業を進めていくという普遍的な部分は垣間見えたのではなかと思うので、特に若い先生方には取り入れられる部分は取り入れてほしいと思っている。

授業は、基本の方があると思う。「守破離」とあるように、まだ何にもないうちは「守」の部分、基本的な型の部分をしっかり身につけるように学生には伝えている。あとは現場で経験を積んで自分の色を出して行ってほしい。今日の授業は決して「私だからできる」という奇をてらったものではない。どんな先生でもできる形でやっている。基本的な形をしっかりと身につけてほしい。

長先生から

机間巡視について、何のためにやるのか？ただ歩き回って質問に答えるものではない。「大体、この生徒が、この読み方なら先に進む」「この生徒がこの程度の読みであれば、単語の指導に戻る」という判断をするものである。我々教師は生徒の学力をしっかりとつかんで授業をやらねばならないと若い先生に伝えたい。若い先生にはぜひ勉強会にたくさん出て授業の基本的なことを学んでほしいと思う。

おわりに

参加者の声にもありましたが、20年前とは思えない色褪せない授業だというのが率直な感想です。「弘前大学の学生のひとりが、佐藤先生の授業に出てきたことばかり」という感想を話していましたが、まったくその通りで、僕も中学校の教員の時に田口先生の授業を長先生から見せてもらってまねしながら「守」の部分をしっかりと作ることができたことが、その後の授業、もっと言えば大学の授業に生きていることに気づかされました。

また、現在、言語活動や自己表現などが重視され、教科書をベースにした基本的な指導が疎かにされていることに危機感を感じています。その意味からも田口先生の「イキイキとした生徒の英語使用には教科書を使った指導が重要」というメッセージは、現在の英語教育にこそ大切にしないといけないことだと改めて考えさせられました。授業を公開していただいた田口先生ありがとうございました。

(文責 佐藤)